

保吉の手帳から

芥川龍之介

青空文庫

わん

ある冬の日の暮、保吉は薄汚いレストランの二階に脂臭い焼パンを齧っていた。彼のテエブルの前にあるのは亀裂の入った白壁だった。そこにはまた斜かいに、「ホット（あたたかい）サンドウィッチもあります」と書いた、細長い紙が貼りつけてあった。（これを彼の同僚の一人は「ほっと暖いサンドウィッチ」と読み、真面目に不思議がったものである。）それから左は下へ降りる階段、右は直に硝子窓だった。彼は焼パンを齧りながら、時々ぼんやり窓の外を眺めた。窓の外には往來の向うに亜鉛屋根の古着屋が一軒、職工用の青服だのカアキ色のマントだのをぶら下げていた。

その夜学校には六時半から、英語会が開かれるはずになっていた。それへ出席する義務のあつた彼はこの町に住んでいない関係上、厭でも放課後六時半まではこんなところにいるより仕かたはなかつた。確か土岐哀果氏の歌に、——間違つたならば御免なさい。——「遠く来てこの糞のよなビフテキをかじらねばならず妻よ妻よ恋し」と云うのがある。彼はここへ来る度に、必ずこの歌を思い出した。もつとも恋しがるはずの妻はまだ貰つては

いなかつた。しかし古着屋の店を眺め、脂あぶら臭くさい焼パンをかじり、「ホット(あたたかい) サンドウィッチ」を見ると、「妻よ妻よ恋し」と云う言葉はおのずから唇くちびるに上つて来るのだつた。

保吉はこの間あいだも彼の後ろうしに、若い海軍の武官が二人、麦酒ビールを飲んでゐるのに気がついていた。その中の一人は見覚えのある同じ学校の主計官しゆけいだつた。武官に馴染なじみの薄い彼はこの人の名前を知らなかつた。いや、名前ばかりではない。少尉級か中尉級かも知らなかつた。ただ彼の知つてゐるのは月々の給金きゆうきんを貰う時に、この人の手を経へると云うことだけだつた。もう一人は全然知らなかつた。二人は麦酒ビールの代りをする度に、「こら」とか「おい」とか云う言葉を使った。女中はそれでも厭いやな顔をせずに、両手にコップを持ちながら、まめに階段のぼを上り下りした。その癖保吉くせのテエブルへは紅茶を一杯いっぱい頼んでも容易に持つて来てはくれなかつた。これはここに限つたことではない。この町のカフェやレストランはどこへ行つても同じことだつた。

二人は麦酒を飲みながら、何か大声に話してゐた。保吉は勿論もちろんその話に耳を貸してゐた訣わけではなかつた。が、ふと彼を驚かしたのは、「わんと云え」と云う言葉だつた。彼は犬を好まなかつた。犬を好まない文学者にゲエテとストリントベルグとを数えることを愉ゆ

快かいに思っている一人だった。だからこの言葉を耳にした時、彼はこんなところに飼かっている勝ちな、大きい西洋せいよういぬ犬を想像した。同時にそれが彼の後ろうしろにうろついていそうな無ぶ気味きみさを感じた。

彼はそつと後ろを見た。が、そこには仕合せと犬らしいものは見えなかった。ただあの主計官が窓の外を見ながら、にやにや笑っているばかりだった。保吉は多分犬のいるのは窓の下だろうと推察すいさつした。しかし何だか変な気がした。すると主計官はもう一度、「わんと云え。おい、わんと云え」と云った。保吉は少し体からだをねじ曲まげ、向うの窓の下を覗のぞいて見た。まず彼の目にはいったのは何とか正宗まさむねの広告を兼ねた、まだ火のともらない軒げ燈んとうだった。それから巻いてある日除ひよけだった。それから麦酒ビール樽だるの天水てんすい桶おけの上に乾ほし忘れたままの爪革つまかわだった。それから、往来の水たまりだった。それから、——あとは何だったにせよ、どこにも犬の影は見なかった。その代りに十二三の乞食こじきが一人、二階の窓を見上げながら、寒そうに立っている姿が見えた。

「わんと云え。わんと云わんか！」

主計官はまたこう呼びかけた。その言葉には何か乞食の心を支配する力があるらしかった。乞食はほとんど夢遊病者のように、目はやはり上を見たまま、一二歩窓の下へ歩み寄

った。保吉はやつと人の悪い主計官の悪戯あくぎを発見した。悪戯？——あるいは悪戯ではなかつたかも知れない。なかつたとすれば実験である。人間はどこまで口腹こうふくのために、自己の尊嚴を犠牲ぎせいにするか？——と云うことに關する実験である。保吉自身の考えによると、これは何もいまさらのように実験などすべき問題ではない。エサウは焼肉のために長子ちようし権けんを抛なげち、保吉はパンのために教師きようしになった。こう云う事実を見れば足りることである。が、あの実験心理学者はなかなかこんなことぐらいでは研究心の満足を感ぜぬのであろう。それならば今日生徒に教えた、*De gustibus non est Disputandum* である。蓼食たてくう虫も好き好きずである。実験したければして見るが好いい。——保吉はそう思いながら、窓の下の乞食を眺めていた。

主計官はしばらく黙っていた。すると乞食こじきは落着かなそうに、往來おうらいの前後を見まわし始めた。犬の真似まねをすることには格別異存はないにしても、さすがにあたりの人目だけは憚はばつているのに違ちがいなかつた。が、その目の定まらない内に、主計官は窓の外へ赤い顔を出しながら、今度は何か振ふるつて見せた。

「わんと云え。わんと云えばこれをやるぞ。」

乞食の顔は一瞬間、物欲しさに燃え立つようだった。保吉は時々乞食と云うものにロマ

ンテイツクな興味を感じていた。が、憐憫れんぴんとか同情とかは一度も感じたことはなかった。もし感じたと言うものがあれば、莫迦ばかか嘘うそつきかだとも信じていた。しかし今その子供の乞食くじが頸くびを少し反そらせたまま、目を輝かせているのを見ると、ちよいといじらしい心もちがした。ただしこの「ちよいと」と言うのは懸かけ値ねのないちよいとである。保吉はいじらしいと思うよりも、むしろそう言う乞食の姿にレムブランド風の効果を愛していた。

「云わんか？ おい、わんと云うんだ。」

乞食は顔をしかめるようにした。

「わん。」

声はいかにもかすかだった。

「もつと大きく。」

「わん。わん。」

乞食はどうとう二声鳴いた。と思うと窓の外へネエベル・オレンジが一つ落ちた。——その先はもう書かずとも好いい。乞食は勿論オレンジに飛びつき、主計官は勿論もちろん笑つたのである。

それから一週間ばかりたつた後のち、保吉はまた月給日に主計部へ月給を貰いに行つた。あ

の主計官は忙しそうにあちらの帳簿を開いたり、こちらの書類を拵げたりしていた。それが彼の顔を見ると、「俸給ですぬ」と一言云った。彼も「そうです」と一言答えた。が、主計官は用が多いのか、容易に月給を渡さなかつた。のみならずまいには彼の前へ軍服の尻を向けたまま、いつまでも算盤を弾いていた。

「主計官。」

保吉はしばらく待たされた後、懇願するようにこう云った。主計官は肩越しにこちらを向いた。その唇には明らかに「直です」と云う言葉が出かかっていた。しかし彼はそれよりも先に、ちゃんと仕上げをした言葉を継いだ。

「主計官。わんと云いましょうか？ え、主計官。」

保吉の信ずるところによれば、そう云った時の彼の声は天使よりも優しいくらいだった。

西洋人

この学校へは西洋人が二人、会話や英作文を教えに来ていた。一人はタウンゼンドと云う英吉利人、もう一人はスタアレットと云う亜米利加人だった。

タウンゼンド氏は頭の禿げた、日本語の旨い好々爺こうこうやだった。由来西洋人の教師きょうしと云うものはいかなる俗物にも関かかわらずシエクスピアとかゲエテとかを喋ちやうちやう々ちやうちやうしてやまないものである。しかし幸いにタウンゼンド氏は文芸の文の字もわかつたとは云わない。いつかウワアズワアスの話が出たら、「詩と云うものは全然わからぬ。ウワアズワアスなどもどこが好よいのだろう」と云った。

保吉やすきちはこのタウンゼンド氏と同じ避暑地ひしよちに住んでいたから、学校の往復にも同じ汽車に乗った。汽車はかれこれ三十分ばかりかかる。二人はその汽車の中にグラスゴオのパイプを啣くわえながら、煙草たばこの話だの学校の話だの幽霊ゆうれいの話だのを交換した。セオソフィストたるタウンゼンド氏はハムレットに興味を持たないにしても、ハムレットの親父おやじの幽霊には興味を持っていたからである。しかし魔術とか錬金術れんきんじゆつとか、occult sciencesの話になると、氏は必ずもの悲しそうに頭とパイプとを一しよに振りながら、「神秘とびらの扉は俗人の思うほど、開ひらき難いものではない。むしろその恐ゆえんしい所以は容易よういに閉じ難いところにある。ああ云うものには手を触ふれぬが好よい」と云った。

もう一人のスタアレット氏はずつと若い洒落者しゃれものだった。冬は暗緑色のオオヴァ・コートに赤い襟えりまき巻まきなどを巻まきつけて来た。この人はタウンゼンド氏に比べると、時々は新刊

書も覗いて見るらしい。現に学校の英語会に「最近の亜米利加の小説家」と云う大講演をやったこともある。もつともその講演によれば、最近の亜米利加の大小説家はロバート・ルイズ・ステイヴンソンかオオ・ヘンリイだと云うことだった！

スタアレット氏も同じ避暑地ではないが、やはり沿線のある町にいたから、汽車を共にすることは度たびあった。保吉は氏とどんな話をしたか、ほとんど記憶に残っていない。ただ一つ覚えているのは、待合室の煖炉の前に汽車を待っていた時のことである。保吉はその時欠伸まじりに、教師と云う職業の退屈さを話した。すると縁無し眼鏡をかけた、男ぶりの好いスタアレット氏はちよいと妙な顔をしながら、

「教師になるのは職業ではない。むしろ天職と呼ぶべきだと思う。You know, Socrates and Plato are two great teachers…… Etc.」と云った。

ロバート・ルイズ・ステイヴンソンはヤンキイでも何でも差支えない。が、ソクラテスとプレトオをも教師だったなどと云うのは、——保吉は爾來スタアレット氏に慇懃なる友情を尽すことにした。

ひるやす
午休み

保吉やすきちは二階の食堂を出た。文官教官は午飯ひるめしの後のちはたいい隣の喫煙室きつえんしつへはいる。彼は今日はそこへ行かずに、庭へ出る階段を降くだることにした。すると下から下士が一人、一飛びに階段を三段ずつ蝗いなごのように登つて来た。それが彼の顔を見ると、突然げんかく嚴格に拳手の礼をした。するが早いか一躍ひとおどりに保吉の頭を躍り越えた。彼は誰もいない空間へちよいと会釈えしやくを返しながら、悠々と階段を降り続けた。

庭には槿まきや樞かやの間に、木蘭もくれんが花を開いている。木蘭はなぜか日の当る南へ折角せつかくの花を向けないらしい。が、辛夷こぶしは似ている癖に、きつと南へ花を向けている。保吉は巻煙まきたば草こに火をつけながら、木蘭の個性を祝福した。そこへ石を落したように、鵲せきれいが一羽舞さかい下つて来た。鵲せきれいも彼には疎遠そえんではない。あの小さい尻尾しっぽを振るのは彼を案内する信号である。

「こつち！ こつち！ そつちじやありませんよ。こつち！ こつち！」

彼は鵲せきれいの云うなり次第に、砂利じやりを敷いた小径こみちを歩いて行つた。が、鵲せきれいはどう思ったか、突然また空へ躍り上つた。その代り背の高い機関兵が一人、小径をこちらへ歩いて来

た。保吉はこの機関兵の顔にどこか見覚えのある心もちがした。機関兵はやはり敬礼した後、さつさと彼の側を通り抜けた。彼は煙草の煙を吹きながら、誰だったかしらと考え続けた。二歩、三歩、五歩、——十歩目に保吉は発見した。あれはポオル・ゴオギャンである。あるいはゴオギャンの転生である。今にきつとシャヴルの代りに画筆を握るのに相違ない。そのまた挙句に気違いの友だちに後ろからピストルを射かけられるのである。可哀そうだが、どうも仕方がない。

保吉はとうとう小径伝いに玄関の前の広場へ出た。そこには戦利品の太砲が二門、松や笹の中に並んでいる。ちよいと砲身に耳を当てて見たら、何だか息の通る音がした。太砲も欠伸をするかも知れない。彼は太砲の下に腰を下した。それから二本目の巻煙草へ火をつけた。もう車廻しの砂利の上には蜥蜴が一匹光っている。人間は足を切られたが最後、再び足は製造出来ない。しかし蜥蜴は尻尾を切られると、直にまた尻尾を製造する。保吉は煙草を啣えたまま、蜥蜴はきつとラマルクよりもラマルキアンに違いないと思った。が、しばらく眺めていると、蜥蜴はいつか砂利に垂れた一すじの重油に変ってしまった。保吉はやつと立ち上った。ペンキ塗りの校舎に沿いながら、もう一度庭を向うへ抜けると、海に面する運動場へ出た。土の赤いテニス・コートには武官教官が何人か、熱心に勝

負を争っている。コオトの上の空間は絶えず何かを破裂させる。同時にネットの右や左へ薄^{うすしろ}白い直線^{ほとばし}を逆らせる。あれは球^{たま}の飛ぶのではない。目に見えぬ三鞭酒^{シャンパン}を抜いているのである。そのまた三鞭酒^{シャンパン}をワイシャツの神々が旨そうに飲んでいるのである。保吉は神々を讚美しながら、今度は校舎の裏庭へまわった。

裏庭には薔薇^{ばら}が沢山ある。もつとも花はまだ一輪もない。彼はそこを歩きながら、徑^{みち}へさし出た薔薇の枝に毛虫^{けむし}を一匹発見した。と思うとまた一匹、隣の葉の上にも這^はつているのがあった。毛虫は互^{うなず}に頷^{うなず}き頷^{うなず}き、彼のことか何か話しているらしい。保吉はそつと立ち聞きすることにした。

第一の毛虫 この教官はいつ蝶^{ちょう}になるのだろうか？ 我々の曾々々^{そそそそ}祖父^{そそそ}父^ふの代から、地面の上ばかり這^はいまわっている。

第二の毛虫 人間は蝶にならないのかも知れない。

第一の毛虫 いや、なることはなるらしい。あすこにも現在飛んでいるから。

第二の毛虫 なるほど、飛んでいるのがある。しかし何と云^{みにく}う醜^{みにく}さだろう！ 美意識^{びいしき}さえ人間にはないと見える。

保吉は額^{ひたい}に手をかざしながら、頭の上へ来た飛行機^{あお}を仰^{あお}いだ。

そこに同僚に化けた悪魔が一人、何か愉快そうに歩いて来た。昔は錬金術を教えた悪魔も今は生徒に応用化学を教えている。それがにやにや笑いながら、こう保吉に話しかけた。

「おい、今夜つき合わんか？」

保吉は悪魔の微笑の中に取りありとファウストの二行を感じた。——「一切の理論は灰色だが、緑なのは黄金なす生活の樹だ！」

彼は悪魔に別れた後、校舎の中へ靴を移した。教室は皆がらんとしている。通りすがりに覗いて見たら、ただある教室の黒板の上に幾何の図が一つ描き忘れてあった。幾何の図は彼が覗いたのを知ると、消されると思つたのに違いない。たちまち伸びたり縮んだりしながら、

「次の時間に入用なのです。」と云つた。

保吉はもと降りた階段を登り、語学と数学との教官室へはいつた。教官室には頭の禿げたタウンゼンド氏のほかに誰もいない。しかもこの老教師は退屈まぎれに口笛を吹き吹き、一人ダンスを試みている。保吉はちよいと苦笑したまま、洗面台の前へ手を洗に行つた。その時ふと鏡を見ると、驚いたことにタウンゼンド氏はいつのまにか美少年に変わり、

保吉自身は腰の曲った白頭の老人に変わっていた。

恥

保吉は教室へ出る前に、必ず教科書の下調べをした。それは月給を貰っているから、出たらめなことは出来ないと言ふ義務心によつたばかりではない。教科書には学校の性質上海用語が沢山出て来る。それをちゃんと調べて置かないと、とんでもない誤訳をやりかねない。たとえばCats pawと言ふから、猫の足かと思つていれば、そよ風だったりするたぐいである。

ある時彼は二年級の生徒に、やはり航海のことを書いた、何とか云う小品を教へていた。それは恐るべき悪文だつた。マストに風が唸つたり、ハッチへ浪が打ちこんだりしても、その浪なり風なりは少しも文字の上へ浮ばなかつた。彼は生徒に訳読をさせながら、彼自身先に退屈し出した。こう云う時ほど生徒を相手に、思想問題とか時事問題とかを弁じたい興味に駆られることはない。元來教師と云うものは学科以外の何ものかを教えただがるものである。道徳、趣味、人生観、——何と名づけても差支えない。とにかく教

科書や黒板よりも教師自身の心臓しんぞうに近い何もかを教えたがるものである。しかし生あいに憎く生徒と云うものは学科以外の何ものをも教わりたがらないものである。いや、教わりたがらないのではない。絶対に教わることを嫌悪けんおするものである。保吉はそう信じていたから、この場合も退屈し切ったまま、訳読を進めるより仕かたなかつた。

しかし生徒の訳読に一応耳を傾けた上、綿密めんみつに誤を直したりするのは退屈しない時でさえ、かなり保吉には面倒めんどうだつた。彼は一時間の授業時間を三十分ばかり過すこした後のち、とうとう訳読を中止させた。その代りに今度は彼自身一節ずつ読んでは訳し出した。教科書の中の航海は不あいかわらず相変退屈を極めていた。同時にまた彼の教えぶりも負けずに退屈を極めていた。彼は無風帯を横なやぎる帆船はんせんのように、動詞のテンスを見落したり関係代名詞を間違えたり、行き悩みなやみ行き悩み進んで行つた。

そのうちにふと気がついて見ると、彼の下検したしらべをして来たところはもうたつた四五行しごぎよしかなかった。そこを一つ通り越せば、海上用語の暗礁あんしやうに満ちた、油断あせのならない荒海あろうみだつた。彼は横目よこめで時計を見た。時間は休みの喇叭らっぱまでにたつぷり二十分は残つていた。彼は出来るだけ叮嚀ていねいに、下検べの出来ている四五行を訳した。が、訳してしまつて見ると、時計の針はその間あいだにまだ三分しか動いていなかつた。

保吉は絶体絶命ぜったいぜつめいになった。この場合唯一ゆいいつの血路けつろになるものは生徒の質問に応ずることだった。それでもまだ時間が余れば、早じまいを宣せんしてしまふことだった。彼は教科書を置きながら、「質問は——」と口を切ろうとした。と、突然まつ赤になった。なぜそんなにまつ赤になったか？——それは彼自身にも説明出来ない。とにかく生徒を護摩ごまかすくらいは何とも思わぬはずの彼がその時だけはまつ赤になったのである。生徒は勿論もちろん何も知らずにまじまじ彼の顔を眺めていた。彼はもう一度時計を見た。それから、——教科書を取り上げるが早い、無茶苦茶に先を読み始めた。

教科書の中の航海はその後ごも退屈なものだったかも知れない。しかし彼の教えぶりは、——保吉は未いまだに確信している。タイフンと闘たたかう帆船よりも、もつと壮烈を極めたものだった。

勇ましい守衛

秋の末か冬の初か、その辺へんの記憶ははっきりしない。とにかく学校へ通かようのにオオヴァ・コオトをひっかける時分だった。午飯ひるめしのテエブルについた時、ある若い武官教官が隣

に坐つてゐる保吉にこう云う最近の椿事を話した。——つい二三日前の深更、鉄盗人が二三人学校の裏手へ舟を着けた。それを発見した夜警中の守衛は単身彼等を逮捕しようとした。ところが烈しい格闘の末、あべこべに海へ抛りこまれた。守衛は濡れ鼠になりながら、やつと岸へ這い上つた。が、勿論盗人の舟はその間にもう沖の闇へ姿を隠していたのである。

「大浦と云う守衛ですがね。莫迦莫迦しい目に遇つたですよ。」

武官はパンを頬張つたなり、苦しうに笑つていた。

大浦は保吉も知つていた。守衛は何人が交替に門側の詰め所に控えている。そうして武官と文官とを問わず、教官の出入を見る度に、挙手の礼をすることになっている。保吉は敬礼されるのも敬礼に答えるのも好まなかつたから、敬礼する暇を与えぬように、詰め所を通る時は特に足を早めることにした。が、この大浦と云う守衛だけは容易に目つぶしを食わされない。第一詰め所に坐つたまま、門の内五六間の距離へ絶えず目を注いでいる。だから保吉の影が見えると、まだその前へ来ない内に、ちやんともう敬礼の姿勢をしている。こうなれば宿命と思うほかはない。保吉はどうとう観念した。いや、観念したばかりではない。この頃は保吉を見つけるが早いから、響尾蛇に狙われた兎のよう

に、こちらから帽ぼうさえとつていたのである。

それが今聞けば盗ぬすびと人のために、海へ投げこまれたと云うのである。保吉はちよいと同情しながら、やはり笑わずにはいられなかった。

すると五六日たつてから、保吉は停車場ていしやばの待合室に偶然大浦を発見した。大浦は彼の顔を見ると、そう云う場所にも関かかわらず、ぴたりと姿勢を正した上、不あいかわらず相変嚴格に挙手の礼をした。保吉ははつきり彼の後ろうしろに詰め所の入口が見えるような気がした。

「君はこの間——」

しばらく沈黙が続いた後のち、保吉はこう話しかけた。

「ええ、泥坊どろぼうを掴つかまえ損あじまして、——」

「ひどい目に遇あつたですね。」

「幸い怪我けがはせずにすみました、——」

大浦は苦笑くしやうを浮べたまま、自みづかあざけら嘲あざるように話し続けた。

「何、無理むりにも掴つかまえようと思えば、一人ひとりぐらいは掴あまえられたのです。しかし掴あまえて見たところが、それっきりの話です、——」

「それっきりと云うのは？」

「賞与も何も貰えないのです。そう云う場合、どうなると云う明文は守衛規則にありませんから、——」

「職に殉じても？」

「職に殉じてでもです。」

保吉はちよいと大浦を見た。大浦自身の言葉によれば、彼は必ずしも勇士のように、一死を賭してかかったのではない。賞与を打算に加えた上、捉うべき盗人を逸したのである。しかし——保吉は巻煙草をとり出しながら、出来るだけ快活に領いて見せた。

「なるほどそれじゃ莫迦莫迦しい。危険を冒すだけ損の訣ですね。」

大浦は「はあ」とか何とか云った。その癖変に浮かなそうだった。

「だが賞与さえ出るとなれば、——」

保吉はやや憂鬱に云った。

「だが、賞与さえ出るとなれば、誰でも危険を冒すかどうか？——そいつもまた少し疑問ですね。」

大浦は今度は黙っていた。が、保吉が煙草を啣えると、急に彼自身のマッチを擦り、その火を保吉の前へ出した。保吉は赤あかと靡いた焰を煙草の先に移しながら、思わず口も

とに動いた微笑^{びしょう}を悟^{さと}られないように噛^かみ殺した。

「難^{ありがと}有^うう。」

「いや、どうしまして。」

大浦はさりげない言葉と共に、マッチの箱をポケットへ返した。しかし保吉は今日^{こんにち}もなおこの勇ましい守衛^{しゅゑ}の秘密^{ひみつ}を看破^{かんぱ}したと信じている。あの一点のマッチの火は保吉のためにばかり擦^すられたのではない。実に大浦の武士道^{ぶしどう}を冥^{めい}々^{めい}の裡^{うち}に照^{しょう}覧^{らん}し給^{たま}う神々のために擦^すられたのである。

(大正十二年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月10日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

保吉の手帳から

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>